管理職・教育委員会の皆さまへ

「いないと困る！」

そんな頼もしい先生だからこそ**鳴教の教職大学院**へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、誰しも高い自己研鑽への意欲を持っているものです。その意欲に応えて、より高い“教師力”を身に付けてもらうことをめざすなら、研究と実践のバランスと融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

本学では、ハイレベルな研究者教員と、幅広い現場を知る実務家教員とがチームを組んで指導に当たります。指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次には勤務校の学校課題アセスメントを、2年次にはフィールドワークを通じて課題解決をめざします。「貴重な中堅教員がいなくなると困る」という声をよくお聞きしますが、大学院在学中も、勤務校にとって大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院がめざすのは、中核リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、異動した学校、ひいては地域の教育界に資することのできる力が身に付くことでしょう。教育の明日を担える人材の育成には、ぜひ教職大学院をご活用ください。

ユニバーサルデザインを活かした
「一人ひとりの子どもが安心して楽しく学び合える
学校・学級づくり」
鳴門教育大学教職大学院 専攻長　佐古　秀一

学校におけるユニバーサルデザイン化とは「だれもが分かりやすく安心して生活できる学校環境」を目指し、学校・学級の一人ひとりの子どもに活かされる支援を行うことです。そして、それは声高に喚起するものではなく、静かに存在し、丁寧な学校生活を送るために必要なものだと思います。

本学の大学院生である服部直美さんは、このような学校におけるユニバーサルデザインの視点を活かし、国語科でコミュニケーション能力を育てるための授業作りに取り組んでいます。

ＳＳＴの授業は「教示、モデリング、ロールプレイ、フィードバック、日常場面での般化の促進」というプロセスで実施されますが、それを定着させるためにワークシートを用いています。毎回提出されるシートにはすべて教員のコメントが記入され、次回の授業への意欲を高めます。ファイリングされた前回のシートを見直して、授業に取り組む生徒の姿が見られるようにもなりました。

また、ペア学習やグループ学習を積極的に取り入れての授業は、どの生徒にも表現・発表の機会を提供します。

このような服部さんの授業に、生徒からは「この授業はおもしろい」「ＳＳＴの授業はいつするの」といった声や、日常場面でのコミュニケーションに関する悩みを聞くことができるようになったといいます。

まさに、教師と生徒の信頼関係の中から生まれた授業であると言えるのではないでしょうか。

学びの共有で進める教育改善
鈴鹿市教育委員会 教育長　長谷川正人

鈴鹿市教育委員会と鳴門教育大学とは、平成２３年４月に連携協定を締結し、鈴鹿市の教育振興に、教育委員会、学校、大学がともに協力し合って取り組む体制を整えています。そのねらいは、鳴門教育大学教職大学院を活用した教員の力量向上であり、それとともに本市の学校教育の具体的な改善を進めることです。このような連携のもとで鳴門教育大学に学ぶことになった服部さんの活動は、服部さん自身が大学院で学んだ知識やスキルを、学校の同僚教員とともに共有し、全ての生徒が安心して学び合える学校づくりを実現することに貢献するものであり、本市の学校教育改善の事例となりうるものといえるでしょう。

今後も、鳴門教育大学教職大学院との連携を通して、本市教員の再教育ならびに学校教育の改善を進展させていきたいと願っています。

◆お問い合わせ
鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス
電話：088-687-6598　ファクシミリ：088-687-6694　E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp
鳴門教育大学ホームページ　http://www.naruto-u.ac.jp/

2012.3.10500

鳴門教育大学 教職大学院に学ぶ

一教員の“教師力”を磨くだけでなく、その力を勤務校の、そして地域の教育を変えていく力にまで高めていくこと。それが鳴門教育大学教職大学院のミッションです。

服部直美 先生
三重県鈴鹿市立鈴峰中学校勤務

CASE 2：2年間の「いいとこ見つけ」

どうして私が？！

教職大学院への入学を打診されたとき、最初に服部先生が感じたのは「どうして私が？！」という戸惑いでした。

服部先生が教職を勤める三重県鈴鹿市では、平成２３年に鳴門教育大学との間に連携協定を結び、学校、大学、教育委員会が連携して教育の振興をめざす体制が作られました。この連携に基づき、鈴鹿市内の中学校２校から教員１名ずつが鳴門教育大学教職大学院で学ぶことになりました。その１人が、市立鈴峰中学校に勤務する服部先生だったのです。

「正直なところ驚きが先に立ったのですが、折しも勤務校が、それまでの研究テーマを終えて、次の新しい課題に取り組もうとしていた矢先でもあり、それに少しでも役立つなら、と前向きな気持ちでお受けすることにしたんです」

驚きと気づきの共通科目

大学院入学にあたり、校長先生から服部先生に託されたミッションは、それまでの数年間、同校で進められてきた道徳教育や人権教育の研究に代わり、新たに重点が置かれることになった特別支援教育の力を身に付けることでした。

「そこで選んだのが、大学院の学校臨床実践コースです。生徒を深く理解し、対人関係やコミュニケーションを育む力を身に付けることで、与えられた課題に応えることができると思ったんです。特別支援教育に造詣の深い先生がいらっしゃった

ことも大きな理由ですね」と服部先生。

しかし、晴れて大学院生となった服部先生は、すぐさま新たな戸惑いに直面することになります。1年次の『共通科目』では、選択したコース以外にも、他のコースで扱うテーマまでを幅広く学ぶこと（※1）になっているからです。

「学校経営やカリキュラム開発といった他分野の講義を受けるというので最初は驚きました。ところが、学校がどのように経営されているのか、カリキュラムはいかにして開発されているのかなど、日々の授業に追われる中では思いの致らなかったことが、どんどん見えてきたんです」

見えてきた自分、そして勤務校

共通科目で視野を広げ、1年次のカリキュラムでもある学校アセスメントで勤務校の実情を客観的に把握する中で、生徒たちの姿はもちろん、自分自身がどんなふうにして支えられてきたかが見えてきました。大学院の仲間からはやる気や刺激をもらえると同時に、他の学校や自治体の生の話も聞けます。これも自分や勤務校を客観的に見る上で大きな力になりますね」

そして迎えた2年次。服部先生は満を持して、勤務校での実習に取り組んでいる。

「今回の実習では、国語科の授業でSST（※2）の技法を活用して『話し手も聞き手も気持ちよく会話できるためには』と題した学習を行うことにしました。そこで国語科の若手教師2人に協力を仰いだところ、『おもしろいですね』『ぜひやりましょう！』と積極的に協力を申し出てくれました。一連の実践の中では、SSTでモデリングと呼んでいる、劇形式で行うコミュニケーションを中心に協力してもらっています。身近な先生によるモデリングは生徒たちも受け止めやすいようで、効果は大きいですよ」

弱みを強みに変える術

「アセスメントで見えてきた勤務校の弱みは『生徒たちに自主性が足りないこと』でした。これまでも学校評価は行ってきましたが、S.I.T.E（※3）に基づいて勤務校に来ていただいた教職大学院の先生の示唆により、従来とは違う視点でデータ分析を行った結果、見えてきたものです。これは学区の特性でもありますが、比較的恵まれた家庭環境で大切に育てられた子どもが多く、自己主張の必要が少ない生活を送ってきたという背景があるように思います。半面、能力は高く、友だち思いのやさしい心を持った生徒が多いのは大きな強みです。そうした生徒たちの『やさしさ』を、思いやりを示す実際の行動につなげ、また学びのテーマ自体を生徒たちに選び取らせることで、『自主性』を引き出していきたいと思っています。そんな実践を組み立てられるようになったのも、教職大学院での学びの成果だと思いますね」

何よりも目の前の子どもの姿を見つめ、それを広い視野の中で育み伸ばす術を手に入れる。服部先生にとって本大学院は、そんな場となり得たようです。

※2：SST（Social Skills Training）は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の精神科教授であるロバート・リバーマンが提唱したコミュニケーション技術の訓練法。「社会生活技能訓練」とも訳され、対人関係や社会生活によりよく適応するためのトレーニングの体系を指す。

だから鳴教

リーダー教員育成のための三層構造カリキュラム（※1）

鳴門教育大学教職大学院がめざすのは、専門的知識と実践的な指導力を兼ね備えたリーダー教員の育成です。

設置コースは、主に現職教員を対象とする「学校・学級経営コース」、「学校臨床実践コース」、「授業実践・カリキュラム開発コース」、そして学卒者を対象とする「教員養成特別コース」の４つ。これら全コースの学生が履修する「共通科目」、各コース・領域群ごとの「専門科目」、そして連携協力校等で行う「実習科目」の三層構造カリキュラムを通じて、学校が直面しているさまざまな課題を構造的・総合的な理解の上で解決していく力を養います。

鳴教教職大学院の魅力 S.I.T.E とは（※3）

鳴門教育大学教職大学院の大きな特色であるS.I.T.E（School Involvement Teacher Education）とは、OJTと大学院専門教育の接合による教師教育のことです。学校課題を実習課題ととらえて共有し、大学院生と大学教員、そして連携協力校（勤務校・置籍校）の先生が一体となって、その課題の解決に取り組みます。

服部先生の研究概要

児童生徒理解、対人関係、コミュニケーション等に関する専門的・実践的な知識と技能の研究

Research

勤務校が掲げる重点方針「特別支援教育の推進」を受け、特別支援教育の視点で授業を見直し、「すべての生徒に有効なユニバーサルデザイン化」を研究テーマに決定。1年次に実施した学校アセスメント（生徒の観察、教員からの聞き取り、個別指導計画の確認、アンケート等）を通じて、生徒たちの自発性が不足していると結論。その克服を取り組みの中心に据えることを決めた

Plan

把握した課題の解決手段として、SST（Social Skill Training）の活用を考案。国語科での実践を計画し、提案。「教示、モデリング、ロールプレイ、フィードバック、日常場面での般化の促進」というSST活用の流れを、教員の協働によるモデリングや、ワークシートの活用によるフィードバックによって強化していくことを、教科部会で合意した

Do

生徒たちの日常生活を想定した対人コミュニケーションをテーマに据え、提示カードやワークシートを活用した視覚化、振り返りシートやそのファイリングによるパターン化、モデリングへの参加やロールプレイ、言語活動を通じた共同学習に留意して活動を積み重ねた

第1時：イントロダクション
「SSTとは」（学ぶ目的）

第2時：「聞く態度について考えよう」
相手の話を聞くときに大切なこと

第3時：「相手のサインを読み取ろう」
気持ちや状態を知るには，伝えるには

第4時：「話しかけてみよう」
人に話しかけるときのポイント

第5時：「話を続けてみよう」
話のきっかけを生かす
開かれた質問と自己開示

第6時：「話を終えるとき」
話を終えるときの相手への心遣い

Check

ワークシート、振り返りシート、授業中の観察によって生徒の意識を、またビデオによって教師の動きを確認。これらを通じて生徒の意識の変容や困り感、教師の動きや発問などを検討し、生徒の反応や感想など意識の流れに沿った授業案を検討することができた。
これらの結果をもとに後期のテーマを27案にまとめ、その中から生徒たちに選択させることで、授業への主体的な参画意識をさらに高めることを狙った

第7時：学びたいSSTを，自分たちで決めよう
（主体性の喚起）

Action

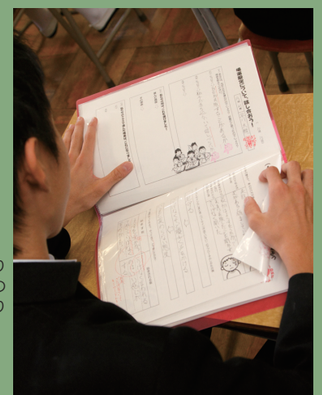
検討に基づいて授業の流れを改善すると共に、生徒たち自らが選んだテーマである「励まし方」「注意の仕方」について、そのSSTを学ぶことに。前期同様、若手同僚教員によるモデリングを経て、ロールプレイ、フィードバックを重ねるが、テーマ自体を自分たちが選んだという意識が、学びをより主体的なものにしている

第８時：「励まし方について考えよう」
第９時：「注意の仕方について考えよう」
第10時：「みんなのアイデアを生活に生かそう」
（学びの般化）

Conclusion

実践してきたプログラムを生かしながら、さらに生徒の困り感に寄り添い、日常生活に合ったプログラムを考え、生徒のコミュニケーションに関する興味関心を喚起していく。またSST実践をモデルに、道徳や総合をはじめ、他教科にも幅広くユニバーサルデザイン的な発想の授業を展開することを目指す

親しみある自学年の先生方を中心に、クラスメイトが加わったモデリングによって、生徒たちは課題の設定場面に引き込まれていく。実感を伴った課題意識が、知識に終わらないコミュニケーションスキルを育む



ワークシートは取り組みの中で使うものと、振り返り用の２枚に分けられ、それぞれを個人用のファイルに見開きで収納することで、後日の振り返りでも有効に機能するように配慮されている